**1900s-1930s**

23 September 2023

豊島 実和

翻訳研究における、この時期の風潮の基盤

・ドイツの文学と哲学の伝統

・ロマン主義

・聖書解釈学

・実存現象学

これらに共通する考え方

・言語は、意思疎通以上の役割を持つ

・言語は、思想や実在についての描写を行う役割を持つ

・翻訳は、もともとのテキストを再構成し変容させるものである

理論のモデルは聖書解釈学

19世紀

Friedrich SchleiermacherやWilhelm von Humboldtは、翻訳を「創造的な力を持つもの」（creative force）と見なし、個々の翻訳技法には言語・文学・国家を作り上げるという文化的・社会的役割を果たす可能性があるのではないかと考えた。

20世紀初期

　近代主義の立場から再考がなされ、文学の形式において実験を行うことで文化を再び活性化することができると考えられた。

　翻訳はそのような「形式の革新」（formal innovation）を行う場となった。

「翻訳（作品）の自立性」（the autonomy of translation）が重要

Walter Benjamin (1923) ウォルター・ベンヤミン

・翻訳とは、もともとのテキストの「新たな生」（afterlife）を作り出すものであり、もともとのテキストが長期にわたって得た評判（the age of its fame）をも取り込んで解釈を行うものだ。

・翻訳によって明らかになる言語間の差異こそが、純粋言語（pure language）[個別の諸言語に共通するもの]という哲学的概念を正当化する。相容れない（mutually exclusive）差異を持つ諸言語が、互いに補完しあう（complementary）志向の総体が、純粋言語である。翻訳を通して、言語間の調和（harmony）である純粋言語に触れることができる。

・特に文法面において、直訳を行うことで、翻訳先の言語で非標準的な表現が生まれることが是とされる（Schleiermacherのforeignization）。それによって翻訳先の言語に変容が起きる。

・Rudolf Pannwitz (1917)にも「他言語によって、自国語を広げ、深めるべきだ」という類似の記述が見られる。（「ドイツ語に翻訳する際に、ヒンディー語やギリシャ語や英語をドイツ語化してはならず、ヒンディー語化・ギリシャ語化・英語化されたドイツ語にすべきである。」←この文自体がドイツ語としては非文。）

Ezra Pound エズラ・パウンド

・文学を実験の場とするドイツの文人の考え方に賛同し、Rudolf Borchardtのダンテの革新的な翻訳（古い時代のドイツ語の方言を使用）を讃えている（Pound 1934）。Pound自身も１３世紀のイタリアの詩人Guido Cavalcantiの詩を古風な英語に訳している（archaism）。それによってCavalcantiのイタリア語の特性を伝えることができると考える（Pound 1929）。

・Cavalcanti（c. 1255-1300, 中世トスカナ語）の作品をエリザベス朝（1558-1603）の少し前の時代の英語で訳すことは、等価とは言えないが、「古い言語」という部分のみ対応している。

・自立した翻訳には、2つの形がある。1つめは「説明的な翻訳」（interpretative）で、通例、原文と併記され、原文の言語的特徴（語彙、韻律）を生かそうとする。2つめは、翻訳先の言語で「創意に富む作品として成立している翻訳」（original writing）で、翻訳というよりも独自の作品のように見える。

・近代主義（modernist）的な視点から、実証主義や言語的な正確さといった哲学的、詩的な要素を重視する。外国語の詩を英訳する中で、英語においてそのような要素を強化したいと考える。

・Pound以前の試みでは、ビクトリア朝時代（1837-1901）にイタリア語の詩を英訳した例があるが、中世らしさを出そうとするラファエル前派の手法によって、イタリア語の「理解」（perception）が「あいまいに」（obfuscated）なってしまっている。

・「英語は600年ほどの間、厳格さに欠ける規則で運用されてきたため、『心の死』（the death of the heart）や『魂の旅立ち』（the departure of the soul）といった表現の意味があいまいになってしまって」おり、英語のそのような欠点を修正したい（Anderson 1983）。

20世紀初期の翻訳の特性は、相反する2つの要素を持つ点

・形式主義：外国語テキストの新解釈に合うような、新しい翻訳技法を追求する

・機能主義：文化的、政治的な目的を持って、翻訳を行う

1920年代

Martin BuberとFranz Rosenzweigは、ドイツにおけるユダヤ人文化のルネサンスに貢献すべく、ヘブライ語の聖書を、音声的特徴を生かす形で翻訳した。ルター訳聖書との違いを出すために、ドイツ語にヘブライ語的な文法や文体を持ち込んだ（BuberのLeitworte “key words”は、現代芸術のleitmotifs “guiding themes”に相当）。

ドイツ国内においても、これと相反する動きもある。

Karl Vossler カール・フォスラー（哲学者）

・1925年、「翻訳とは自国の言語を保存し発展させるという点で価値がある」とした（Vossler 1932）。特にBorchardtの*Deutsche Dante*のような文学的翻訳において有効（「言語の意味が最終的に珍しい花を生み出している」（1932））。

・「オリジナルのテキストから外国語の要素を取り込む」ことに反対する「芸術帝国主義」（aesthetic imperialism）も見られる。「芸術的観点から見て完璧な翻訳とは、外国語の要素を巧みに取り込みつつも、自国語の言語の本質を守るような翻訳」（Lefevere 1977）

・ドイツにおいてはforeignizationとは非常に国家主義的なものであった。ナポレオン戦争中にフランス文化の台頭に抵抗し、ドイツ語を守ろうとする動きだった。

Hilaire Belloc (1931) ヒレア・ベロック

　より保守的な立場。形式面での革新的な翻訳を批判し、翻訳音の社会的機能についての主張を行う。「外国語の要素が感じ取れる翻訳は失敗。翻訳とは西洋世界の文化的統一性を守るためのもの。共通語のラテン語で全てを理解するという伝統が失われつつある。」（Taylor Institutionでのレクチャー）

Ulrich von Wilamowitz-Moellendorff ヴィラモーヴィッツ=メレンドルフ

・1920年代に、古典文学の翻訳においては「単語レベルの浅い訳ではなく、作品の本質（spirit）を重視すべき。昔の詩人が我々に理解できるわかりやすい言語で話しかけてくるように」と述べた（Lefevere 1992）。これはドイツではなく、フランスやイギリスの流れ。

・きちんと伝わる、理解できる訳であることが重要。「ギリシャの理想」を翻訳し、「その基準に照らし合わせることで、現在の道徳的・精神的堕落の度合いを知ることができる」（Lefevere 1992）

Jorge Luis Borges (1935) ホルヘ・ルイス・ボルヘス（アルゼンチンの作家）

・『千夜一夜物語』（*Arabian Nights*）の翻訳を比較。直訳的なものであっても、それぞれに異なる。また、広く読まれているものが、正確だとは限らない。18世紀のAntoine Galland訳は、「最も不正確だが、最も広く読まれた」。これは歓迎すべきことであり、その意味するところを研究すべき。「原文からの創造的逸脱が重要な焦点」。

・原文からの逸脱について、文化的・政治的観点から考察。オリエンタリズム、反ユダヤ主義、男性優位主義、禁欲的、中流階級、学問的、といった特徴に着目し、語彙、等語法、韻律、談話機能といったテキストの特徴を分析。翻訳者の「文学面における習慣」（literary habits）や翻訳先の言語の文学的伝統を考慮して、分析を行う。

・「文学的知識のある翻訳者によって、しっかりと練られた翻訳」が最上であると考える。「古風な言葉遣い、俗語、造語、外国語からの借入語が見事に入り混じった混合型（heterogeneous）の翻訳」を高く評価。ドイツ語の学術的翻訳に足りないのは、ドイツ語に外国語の要素を取り入れるという「ドイツ語の逸脱」を是とする意識。

José Ortega y Gasset (1992) ホセ・オルテガ・イ・ガセット（スペインの哲学者）

・1930年代末には、翻訳とは言語的な実験であり、「文学の中の独自の分野であり、独自の基準と目標を持つもの」だと考えられるようになる。有名な作家や思想家、文学批評家、文献学者が注目し、特定の時代や言語における翻訳を扱う研究論文が出される。その議論が、今日に続いている。

・1937年、“The Misery and the Splendor of Translation”において、翻訳に関するドイツの伝統的な考え方を支持。Miseryとしたのは、「感じ方や考え方が全く異なる」ため、言語面でも文化面でも乗り越えられない大きな違いがあるため。Splendorとしたのは、その違いを利用することで「読者を自身の言語習慣から引き離し、外国語の枠組みに投げ込んでやることができる」ため。

・現代に足りないものを知ろうとする際に、翻訳は有用。数学や物理科学に欠けている、歴史的な視点を持っているため。「昔の人々は、現在の我々とは異なっている。だからこそ、彼らが必要である。」昔の人々の書いたものを翻訳することで、その大きな違いを、現代の人々に見せることができる。